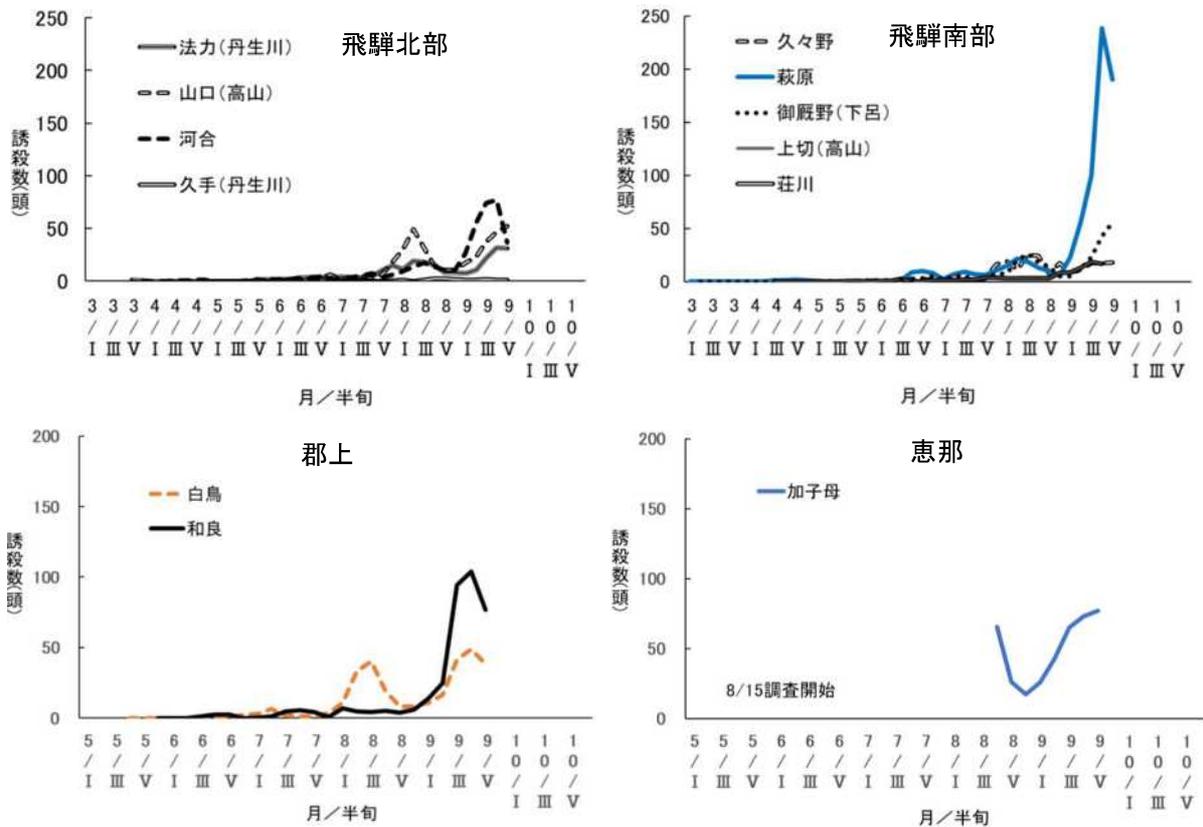


トマトキバガの発生が急増しています！ 防除を徹底しましょう！

1. 発生状況

- 1) 9月後半に県内の夏秋トマト産地の各調査地点でトマトキバガのフェロモントラップ誘殺数が急増した(図1)。数地点で約30日ごとの発生ピークが見られること、および昨年は10月に誘殺数が急増した(図2)ことから、今後更に増加すると推察される。
- 2) 9月24日現在、本虫による食害は、夏秋トマト産地全体で広範囲に発生している。防除暦では今後、トマトキバガに効果のある薬剤の散布回数が減ることから、被害の拡大が懸念される。
- 3) トマトキバガは海外からの侵入害虫で、生態が不明な部分があり、総合的な対処法は確立されていない。一方で、海外では薬剤抵抗性を獲得した個体群の出現が報告されていることから、適切に農薬を選択して防除を行う必要がある。



※飛騨北部・南部は便宜的に区分けした。※※飛騨南部上切、郡上、恵那は各農林事務所農業普及課の調査による。

図1 夏秋トマト産地におけるフェロモントラップによるトマトキバガの誘殺数の推移

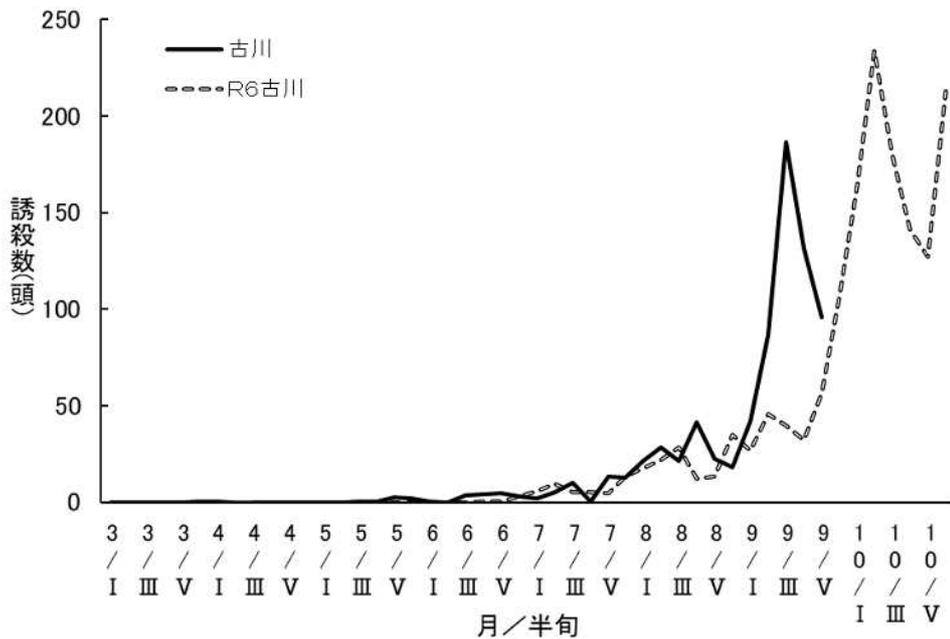


図2 昨年と比較したフェロモントラップによるトマトキバガの誘殺数の推移

2. 防除

1) 薬剤による防除

本虫は薬剤抵抗性が発達しやすいことが知られている。農薬の選定にあたっては、同じ系統の農薬を、連続した世代間（1世代は約30日）で使用しないことに特に留意し、異なる系統の農薬を用いてローテーション散布する。

本虫に対して登録されている農薬は表1のとおり。

現在、株が繁茂し、特に抱き畝の内側等は農薬がかかりにくい状況にあることから、登録の範囲内で薬液を多めに作り、丁寧に散布し、かけ残しがないようにすることが非常に重要である。

2) 耕種的防除、物理的防除

被害植物及び残さは、土中に深く埋める又は、ビニール袋等に密封して本虫を死滅させるなど、適切に処分する。

本虫はマルチ上に繭をつくることが確認されている（写真4）。本虫が発生したほ場では、本虫が死滅するよう、マルチを適切に処分して、ほ場に残さない。

3) 収穫末期でも防除を行う必要性

越冬個体を少なくするため、発生がある場合は収穫終了に近いほ場であっても、可能な範囲で防除等の対策を講じる。

3. 長期的な視点に立った防除の考え方

1) 薬剤抵抗性の発達と越冬について

本虫については、中南米およびヨーロッパにおいて深刻な薬剤抵抗性の発達が生じているとの報告がある。一方で東北地方のトマト栽培施設では越冬が疑われる事例が複数確認されていたが、飛騨地域でも今春、トマト栽培施設で越冬したと考えられる事例が複数確認された。

薬剤抵抗性を獲得した個体の越冬により、翌春から増殖する個体に薬剤抵抗性が引き継がれる事態を回避するために、適切な防除及び管理により越冬個体を少なくすることが重要である。

2) 越冬させない管理

本虫は耐寒性が強いことが知られているため、ハウスの被覆はできる限り除去して、なるべく長期間、積雪下や寒気にさらすことが望ましい。

一方で本虫は、温度の低下に伴い、体液の不凍物質の濃度が増し、耐寒性が強くなることが報告されている。従って冬期間でも被覆を継続するハウス施設では、初冬の冷え込む夜や降雪がない厳寒期に、開放し寒気にさらす等の管理が有効であると考えられる。



写真1 トマトキバガ成虫(色調に個体差あり)



写真2 被害葉と幼虫



写真3 潜葉痕による害虫種の見分け 葉の表裏(上: トマトキバガ、下: ハモグリバエ)



写真4 蛹、マルチ上に形成された繭、土繭



写真5 果実被害痕 1



写真6 果実被害痕 2

表1 トマトキバガを適用害虫とし、トマト・ミニトマトに登録がある農薬一覧（散布剤）

（令和7年9月26日現在）

系統 IRACコード	成分名	農薬名	適用作物名		希釈倍数	使用液量 (L/10a)	使用時期	本剤の 使用回数	効果※ 判定例
			トマト	ミニトマト					
5	スピネトラム水和剤	ディアナSC	○	○	2500～5000倍	100～300	収穫前日まで	2回以内	◎
5	スピネトラム水和剤	ラディアントSC	○	○	2500～5000倍	100～300	収穫前日まで	2回以内	◎
5	脂肪酸グリセリド・スピノサド水和剤	ダブルシューターSE	○	○	1000倍	100～300	収穫前日まで	2回以内	◎
6	アバメクチン乳剤	アグリメック	○		500～1000倍	100～300	収穫前日まで	3回以内	○
6	エマメクチン安息香酸塩乳剤	アフーム乳剤	○	○	2000倍	100～300	収穫前日まで	5回以内	○
6	レピメクチン乳剤	アニキ乳剤	○	○	1000倍	100～300	収穫前日まで	3回以内	-
11A	BT水和剤	ゼンターリ顆粒水和剤	○	○	1000倍	100～300	発生初期 但し、収穫前日まで	-	-
11A	BT水和剤	エスマルクDF	○	○	1000倍	100～300	発生初期 但し、収穫前日まで	-	○
11A	BT水和剤	デルフィン顆粒水和剤	○	○	1000倍	100～300	発生初期 但し、収穫前日まで	-	○
11A	BT水和剤	チューンアップ顆粒水和剤	○	○	2000倍	100～300	発生初期 但し、収穫前日まで	-	-
11A	BT水和剤	サブリーナフロアブル※※	○	○	1000倍	100～300	発生初期収穫前日まで	-	-
13	クロルフェナピル水和剤	コテツフロアブル	○	○	2000倍	100～300	収穫前日まで	3回以内	◎
22A	インドキサカルブ水和剤	トルネードエースDF	○		2000倍	100～300	収穫前日まで	2回以内	◎
22A	インドキサカルブ水和剤	ファイントリムDF	○		2000倍	100～300	収穫前日まで	2回以内	◎
22B	メタフルミゾン水和剤	アクセルフロアブル	○	○	1000倍	100～300	収穫前日まで	3回以内	○
28	クロラントラニリプロール水和剤	プレバソソフロアブル5	○	○	2000倍	100～300	収穫前日まで	3回以内	-
28	シアントラニリプロール水和剤	ベネビアOD	○	○	2000倍	100～300	収穫前日まで	3回以内	◎
28	フルベンジアミド水和剤	フェニックス顆粒水和剤	○	○	2000倍	100～300	収穫前日まで	2回以内	◎
28	テトラニリプロール水和剤	ヨーバルフロアブル	○	○	2500倍	100～300	収穫前日まで	3回以内	◎
30	フルキサメタミド乳剤	グレーシア乳剤	○	○	2000倍	100～300	収穫前日まで	2回以内	◎
UN	ピリダリル水和剤	プレオフロアブル	○	○	1000倍	100～300	収穫前日まで	2回以内	○

※効果判定例は日本植物防疫協会委託試験成績概評による ◎：高い防除効果あり、○：防除効果あり、-：試験例なし

※※サブリーナフロアブルの登録適用作物名は野菜類（はくさいを除く）